

クリップが邪魔をするなり三年間積み上げしもの破
らんとするに 黒岩剛仁

出向していた職場を去るときの一連中の一首。引き出しの中や棚の書類を整理したり廃棄したり……。三年の間に、さまざまな意味で積み上げてきたもの、たまってしまったものへの感慨。会社員ならだれも味わうだろう感慨である。初二句の逡巡の表現に注目。

健軍町レール途切れしその先に大地震の傷深き町あり 青山仁

「心の花」熊本歌会に出席したおりの作のようだ。健軍町は熊本の市電の駅で終点になっている。そこからの延長線上に、熊本地震の震源地となった益城町がある。熊本地震から一年以内、ドキュメント・タッチで、タイムリーな作にしあげている。

武州川越刀剪舗町屋勘右衛門十一代目包丁を研ぐ 北澤道子

看板にあった漢字だらけの名詞の列をそのまま短歌に持ちこんだ一首。平仮名は二字だけ、あとはみな漢字という、見た目にも特色のある構成になっている。内容的には、包丁を砥ぐ職人技に惹かれた一連中の一首。「研ぐ」がいいか、「砥ぐ」がいいか、考えどころである。砥石の「砥」を使った方が通りがいいが、「研」は「研究」の「研」で、極める意味があるので、ここでは「研」でよかったように思う。

うれしくてほかになければ棒立ちのまま幼子はただ舌をだす 松橋雅実

短歌の現在

No.431 今月の15首を読む

佐佐木幸綱

まだ一、二歳ほどの幼児だろう。ずうつと舌を出していたのではない。スナップ写真のようにその子の一瞬の表情をとらえてみせた一首と読む。ユーモアのセンスがうれしい。

霽こめてただただ白き東京の52階の窓に向き合う 鈴木陽美

東京なのに東京ではない感じで、高層ビルの霽の窓を見ていた、そんな時間が主題。意味内容を最小限にしぼった一首のたたずまいは、近代短歌史の目ざしたところの一つで、玄人好みの作にしあがっている。ただ、東京らしい何かの一つほしかった。というのは、このままでは「ベルリンの……」、「ロンドンの……」でもよくなってしまう。

あれこれと指図をしては出掛けたる妻より確認メー ルが届く 稲垣国男

一読、思わず笑ってしまった。ユーモアの歌である。出先からも指図がくるという駄目押しのような下句がじつに、うまい。あんがいうれしそうな感じがまたいい。わたくしの何を入れるか漆絵の小箱にそよぐダンド

ポロギク 岸並千珠子

漆の小箱にはダンドポロギクという不思議な名前の草が描かれている。漢字で書くと「段戸襦袢菊」。そのダンドポロギクの絵が描かれている小箱の中に何を入れたらいいのか。段戸襦袢菊は、北米原産の草で、日本で最初に発見されたのが愛知県段戸山だったのでこの名前がつけられたという。ポロギクは、花の後の綿毛がポロの